
天気予報士な恋

キロキロなお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天気予報士な恋

【Nコード】

N5490S

【作者名】

キロキロなお

【あらすじ】

飯田和美（いいだ かずみ）32歳。彼氏に振られ雨に降られた散々な夜に差し出された傘、そしてその相手は若くて美形……見覚えがあるのに、思い出せないのはどうして?! 知ってるのに知り合いじゃない、という彼に戸惑いつつも流されるのは、彼氏に振られたせい? それとも……? わたし、年下はタイプじゃないんですけど!!

序・雨

その日、飯田和美「いいだ かずみ」は散々だった。

付き合って一年の年上彼氏には一番嫌いな言葉で別れを告げられ、悲しいやら腹立たしいやらで何とか終電に乗ったはいいいけれど駅から出て気づけば雨に降られていた。

しかも、どしゃ降りってどういうこと？

駅を出た時から、少し小雨程度には降っていたけれど……気分的に傘をさす気にはなれなくて、鞆に忍ばせていた折り畳み傘は出さなかった。

「ああっ。もうっ！ アイツのせいで由良くんの天気予報も無駄になっちゃったじゃない。バカア！！」

ぐちゃぐちゃに濡れたパンプスでアスファルトの道を蹴り上げれば、派手な水しぶきができる。

頭から足の先まで雨に濡れて、和美の胸のあたりまでである髪もパーマがストレートになるくらいまで滴が滴っていた。唯一の救いは今の季節が「初夏」だということ。

とはいえ、このまま濡れたままでは風邪をひくかもしれない。

冷えてきた体を抱いて、足早に家路に急ぐ。

一人暮らしのマンションの部屋だけれど、体を温めるくらいはできる。

早く、熱いシャワーでも浴びなければ……彼氏と別れたからと、病気になるようなヤワな女にはなりたくない。

別れ際の彼の言葉を思い出して、顔が強張る。

（どうして男って……）

「すみません、よろしいですか？」

おずおずとした声に、和美は振り返る。

傘をさした若い男性が立っている。

街灯の明かりでわずかに見える印象だけれど、かなりの美形だ。なんとなく見覚えがあるけれど、どこで見たかは定かではない。

（誰？）

と、眉根を寄せ、彼の、傘を持つのは逆の手を見てあっと思う。「す、すみません！」

それは、自分の履いていたハズのパンプスだった。

序・雨（後書き）

またまた連載を始めてしまいました。が、とりあえず本筋は三話程度で終わる短くて軽いお話です。その後ネタと彼視点の番外をつけて、全部で七話くらいかな？ と思っております。今のところ……もう少し続きが書きたくなるかもしれないので、未確定ですがよろしければお付き合いください（本編、その後にはR15表現を含みます）。

第1話 ところにより豪雨。

「いいえ。大丈夫ですか？」

優しい、そしてやはり聞き覚えのある声に和美は悩む。

自分の身近にこんな見目の麗しい素敵な男性はいないはずだ。しかも、彼は和美よりもかなり年下のような気がする。

三十路を過ぎた和美にとって見れば、どうやら二十代前半だと思われる相手との接点が見えない。

もしかして、客だろうか？

指輪やネックレスといった貴金属のブランドショップに勤める和美のお客には若い男性もいる。が、それにしても顔を覚えていないというのは解せない。

こんなにも声は耳に馴染んでいるのに……常連様ではないのだろうか？

パンプスを履いた和美は、再度顔を上げて彼の顔をよく見ようと考えた。

「……あ、あの」

「なんですか？」

と、年若い彼は首を傾げた。

可愛い！

弟がいれば、こんな感じだろうか？ とつい頬が緩んでしまう。

しかし、近い。近すぎるんです、距離が。

目の前に男の人の顔がある、というのにそのフワンとした爽やかな雰囲気には危険な感じはしなかった。

「……どこかで、お会いしたことありました？ すみません、見覚えはあるんですけれど」

和美は降参をして、相手に訊いた。

すると、彼は可笑しいというように微笑んで、「知りたいですか？」と囁く。耳のそばで……って、ソレ必要ないよね？

無駄に距離が近いような気がするんですけど。

それとも、最近の若者のパーソナルスペースはこんなに狭まっているのでしょうか。

お姉さん、とてもついていけないわ。

身を引いて和美は「そ、そうね」と頷いた。彼の手に腕を取られ、引き寄せられる。

「送りますよ」

と彼は言う。

纏う空気は長閑ながら案外強引なのだ、と和美は彼が傘の中に入れてくれたのだと知って、少し落ちこみかけていた気分が浮上した。

マンションの部屋の玄関先で聞いた彼の答えに、和美は言葉を失った。

「え？」

「だから、ナンパです」

につこりと彼は爽やかに笑って、やっぱり見覚えのある顔をそばまで落としてきた。

その時まで、和美は危機感を持っていなかった。

若くて、たぶん女性に不自由をしてなさそうな外見の彼が、まさか自分を狙っているとは思えない。そこまで自意識は過剰ではないつもりだし。

それに、和美の偏見というか……自分よりも年若い男性をそういう対象としては見たことがなかった。

しまった、と思った。

玄関のドアノブにある鍵穴に鍵をさしこんでしまった。

身の安全を考えるなら、許すべきではなかったのに……部屋まで呼んでお礼をしようと考えたのは、やはり今日彼氏に振られたのが堪えていたのかもしれない。

和美の止まった手を彼が掴んで、鍵を廻すと扉を開けた。

滑りこむように中に入って、扉を閉めチェーンまでかける。

暗闇の自分の家の玄関で繰り広げられたそれに、和美はまるでドラマみたいだと妙な気分になった。

（そうか……）

と、納得する。

「本気じゃ、ないんでしょ？」

「どうして、そう思うんですか？」

「だって、あなたモテそうだもの……行きずりエッチなんてする必要ないじゃない？」

和美が至極真面目に言うのを彼は少し考えるように黙って、目を彼女に合わせた。

「ナンパ、って言ったのが悪かったですね。訂正します。僕らは知り合いではありませんが、僕は貴女を知っていますし貴女も僕を知っている」

それは、知り合いではないのだろうか？

首を傾げる。

「知り合いじゃないのに、知ってるの？」

「ええ、たぶん。僕もさっきまでは 貴女が 僕を知ってくれているとは知りませんでした」

「ええっ？ ど、どういうこと？」

「僕の、一方通行だと……思ってた」

目を伏せると、彼はその誠実そうな顔を寄せて身動きが取れないように壁にはりつけた和美の冷えた唇に自分のそれを重ねて、啄む優しいキスを降らせた。

第2話 もしかして霹靂。（前書き）

この場面にはR15程度の会話・描写が含まれます。ご注意ください。
い。

第2話　もしかして霹靂。

なんだかわからないうちに、そういうコトになった。

「やつ……、あ」

体が冷えてはいけないとシャワーを浴びて、その後ベッドに案内をやりわりと強要され現在に至る。

今日、初めて知り合いになった(らしい)彼とこういうコトになっているのは、身持ちの固い自負がある和美からすれば不本意ではあるけれど……行きずりエッチだと割り切れば相手は悪くないし、素直に気持ちいいとも思える。

ただ。

「ね、え？」

最中に訊いていいのかはわからないが、教えてもらいたいことが一つあった。

彼は動きを少し緩やかにして、聞く体勢になってくれる。

でも、それでも微妙な刺激はあるんだけど……。

「なんですか？」

「……なまえ」

「名前？」

「あなたの、なまえ……聞いてないわ」

「みなど、です」

「ミナト？」

「苗字は、よく知ってると思いますけど」

少し意地悪そうに呟いて、ミナトは覗きこんでくる。

「僕も貴女の名前、聞いてませんよ？　苗字は表札でわかりますけど、飯田さん」

「……和美」

「飯田かずみ、さんですね。ココ、気持ちいいですか？」

「あつ！」

「ミナト、って呼んでください。かずみさん」

また動きはじめた彼に翻弄される。「ミナト、みなとぉ！」と促されるまま、連呼して……ちよつと恥ずかしくなる。

名前を聞いて、最初に呼んだ場面がコレでいいの？

「かずみ、さん。可愛い」

若いからこそその滲刺とした色気と、男っぽい表情に（まあ、いいか）と思う。

社交辞令だつて、ちゃんと体で納得してるよ……だつて、年上なんだしね。

ギュツと、ミナトの背中に抱きついて和美は考えることを投げ出すと、すごく気持ちよくなった。

遠くで声がした。よく耳に馴染んだ、あの人の声だと脳裏をよぎって次に浮かんだ疑問にハツとする。

『苗字は、よく知ってると思いますけど』

そう言った、彼の顔を思い出して愕然とする。どうしてもすぐに気が付かなかつたのだろう。

彼を和美はよく知っている。そう、一方的によく見ていたのだ。

朝の天気予報で。

「由良（ゆら）……湊（みなと）」

呆然と朝のそれに出ている昨夜の彼を見つめて、信じられないと首を振った。

夢だと言われたほうが納得がいくのに、確かに昨日の夜の痕跡が

部屋のあちこちにあつて（体にも、あつて）……しかも、夢の中で
帰り支度を整えた彼が和美にこう訊いていたのを覚えている。

『和美さん、部屋の鍵のスペアはある？』

どうして、そんなことを訊くのかと訝しく思いながらも頷いた（
のだと思う）。

『じゃあ、借りてくね。今夜、返しに来るから』

……返しに来る、そう言つてなかった？

おぼろげな記憶の通りに鞆の中を探れば、確かに部屋の鍵はな
なつていて否が応にも現実味を帯びる。

「ちょ、ちよつと待つてよお！ 無理っ、由良くんに会うなんて！
！」

平静でいられる自信なんてこれっぽちもなくて、知らないから
抱き合えたのだと体が熱くなった。

「由良くんと、由良くんとしちゃったの？ う、嬉しすぎて死んじ
やうかも……」

それが、たとえ行きずりのナンパでも。

喜ぶべきシチュエーションではないと頭では理解しながら、気持
ちは弾む。失恋の痛手なんてもう忘れるくらいに！ ……そう考え
て、和美はホツとした。

第3話 くもり。のち、晴れ？（前書き）

引き続きR15程度の表現が含まれます。ご注意ください。

第3話 くもり。のち、晴れ？

言葉の通りに玄関先に立った彼を見て、和美はやはり夢見心地だった。

「ホントのホントに由良湊（ゆら みなと）、だったのね」と。

我ながら情けないというか、間抜けな言葉を大好きな気象予報士の彼に投げかける。

毎朝欠かさずに見て出勤している朝の情報番組『ミーニング・サン』のお天気お兄さんとして有名な彼は、今年でコーナーを任されて二年目の24歳。

上は悠悠自適のご婦人からキャピキャピの中高生まで、女性からの支持がとにかく高い。

もちろん、和美もそんな彼に見入っていた女性の一人ではある。

彼の天気予報は分かりやすく、親切で、しかも正確だ。

にわか雨が降るかもしれない地域から、そのタイミングまでの確に教えてくれるから朝は必ず見るようにしている。

しかも、その理想の弟みたいなさっぱりそこらじゃ見られない癒される笑顔で「いつてらっしゃい」と手を振られる瞬間は、出勤前の至福だった。

「ええ、まあ。そんなに僕の顔、珍しいですか？」

まじまじと眺められ居心地悪そうに彼は言い、和美は「ごめんなさい」と謝った。

「ビックリしちゃって。テレビでしか見たことないし、昨日はだから気が付かなかったって言うか……繋がらなかったのかしらね。記憶とあなたが」

「そうですか？」

微笑む彼の顔はテレビで見る爽やかな男性そのものだ。けれど、

どこかドキリとする。

昨夜のことを思い出した。

欲情する湊のこと。

理想の弟のハズなのに……翻弄されてどうするの？

「あ、そうだ。鍵……」

彼は言うつと、ポケットから鍵を取り出した。

和美が受け取ろうとすると、スイと引いてそれにつられて伸ばした彼女の腕を取る。

あ、と思った時には昨日と同じように壁にはりつけられていた。

「由良、さん？」

「コレ、返さなくちゃ駄目ですか？」

と切なそうな顔をする。

その眼差しが昨日とダブって熱を帯びるのに魅入ってしまう。

「あ……」

やっぱり彼は見た目よりも ずっと 強引なのだとは知らされる。ツ、と足の内側に冷たい金属の感触がして、それが自分の部屋の鍵だと気づいたのは湊が告げたからだった。

「いいでしょう？ この鍵、僕が貰っても」

片足が持ち上げられ、鍵が押し当てられる。ピツとストッキングが破られ、外気が肌を直に這った。

「んっ、やっ…… 由良さん。今日も、するの？」

彼がそんなに女性に飢えてるとは思えないけれど、と和美は不思議に思う。

それと同時に彼の方もよくよく彼女を見つめて、眉間にシワを作った。

そんな困った表情も可愛い、と和美は微笑んでしまう。

「しますよ？ っていうか、和美さん…… 僕のことどう思ってます？」

「え？ 理想の弟かなあ？ 癒されるもの」

言い終わらないうちに鍵が深く抉るから、息を呑む。

「ん！」

「いいんですけどね、弟でも。ただ、僕は 貴女が 好きなんです」
「あつ……う、嘘っ」

疑って目を開ければ、すぐ目の前に彼の誠実な眼差しがあった。

「嘘じゃ、ありません。僕は、ずっと 貴女を 見てた……」

唇が重なつて、ただなぞって吸いつく優しいキスをする。なのに、足の付け根では彼の持つ部屋の鍵が、乱暴にこじ開けようとする。

「ココ、開けても……いいですよね？」

（ 昨日、もう、勝手に開けてるクセに ）

恥ずかしい返事をする前に中で回転されて、喘いだ和美の体は軽くふっ飛んだ。

玄関先で、立ったまま。

「昨日、本当はこうしたかった」

と、嬉しそうに由良湊は微笑んだ。この場面にそぐわない爽やかさは「犯罪」だと思う。

その顔で「湊って呼んで？」とお願いされれば従わずにはいられないし、拒絶なんて考えられない。

下着をよけて準備を整えた彼が突き上げる。すでに手に鍵の存在はなく、片足を持ち上げた腕とは逆の手は彼女の開いたブラウスの中に入って弄っている。

押し上げられたブラの下に覗く二つの膨らみを口と指先で可愛がる。

壁と背中が擦れる動きとともに、どこかで鈴の音が鳴っている。

部屋の鍵に付いたマスコット付きの鈴を思い出して、見えないけれどどこかに鍵があるのだとぼんやりと考えた。

第3話 くもり。のち、晴れ？（後書き）

次回で本筋は終了です。が、続いて後日談がありますので、よろしければお付き合いください！

第4話 たぶん、晴れ。

朝、出勤しなくちゃ……と鳴り響く目覚まし時計に手を伸ばそうとして、その存在にハツとする。

「湊！」

「ん？ あ……和美さん。おはようございます」

朝の至福が微笑んでる、とついつられて「おはよう」と返して、違う！ とキツと彼を睨んだ。

「それどころじゃないってば！ もう、七時なのに。どうしてのんびりしてるのっ？」

「え？ 何がですか？」

と、不思議そうにする湊にイラッとした。

「仕事！ もう、番組始まる時間じゃないっ」

ホラ！ と和美が時計を手に迫ると、彼はポカンとして次に笑った。

そのあまりの無邪気さに怒っているのも絆される。

（くう！ なんて朝の似合う子なのっ。流石よ、由良くん）

「和美さん。今日、土曜日ですよ？ 僕は基本、土日は休みなんです」

「へっ？ そうなの？ ……そういえば、平日しか見なかったかな？ 駄目ねえ、シフトで働いてると曜日感覚が鈍くて」

「和美さんは今日も仕事？」

ベッドの上で彼は訊き、和美は頷いた。

「そうよ。土日のどちらかは基本出勤なの。今週は土曜出勤で明日は休み」

支度をしようとベッドから足を下ろして、羽織っていたブラウス

の前を留める。下着も履いて、と視線を感じて振り返ればジッと湊が見ていた。

「な、なに？」

「せっかく今日一日一緒にいられると思ったのに、残念だな……と
思っ」

心なしかシユンとなった彼に、和美の母性本能がくすぐられる。

今の今まで、年下男なんて眼中になかったのに由良湊に関しては
「別格」だと認めるしかなさそうだ。

「湊、ごめんなさいね。明日は休みだから……」

「うん、だよな？　じゃあ、今日は何時に終わる？　迎えに行くか
ら、外で何か食べましょう」

につこりを笑って誘う彼に頷いて、和美はつられるようにまた微
笑んだ。

「そうね、じゃあ……」

纏わりつくみたいに朝の支度を手伝った彼は、玄関先で和美の頬
にキスをした。

「じゃあね、今日一日頑張っ」

「う、うん。湊も、気をつけて帰ってね」

慣れない若い恋人同士みたいな朝の風景に、今更自分が立たされ
るとは思わなかったと頬が熱くなる。

（甘い、甘すぎ……やっぱり、若いわ。ついていけるかしら、わた
し）

「和美さん」

「え？」

俯いていた顔を上げれば、傘を持つ彼女の手を掴んだ彼はニッコ
リと微笑んで、取り上げた。

「今日は晴れたよ。傘はいらない」

第4話 たぶん、晴れ。（後書き）

本筋は、これで終わりです。出会いの話、って感じですが……後日談として続きが少しあります。もうしばらく、お付き合いください！

第5話 とりあえず、今日も晴れ。

(あ……)

やっぱり雨が降ってきた、と飯田和美「いいだ かずみ」は店のウィンドウから空を見上げた。

朝から曇天だった其処からは、パラパラと小降りではあるけれど傘がないと困る程度に雨が落ちてきている。

『今日は晴れだよ。傘はいらない』

と、朝の出掛ける玄関先で告げられた彼の言葉が 嘘 だったのだと知る。

彼は気象予報士で、若いけれどその正確さと人柄で朝のお天気コーナーを任されている結構な有名人だ。

和美も彼の気象予報士としての正確さと親切な解説には惚れこんでいる視聴者の一人だから、今回のそれが外れたのだとは思わない。きつと、ワザとだ。

知り合ったのは、つい三日前の夜だけでも性格はなんとなくわかる程度に親しい間柄だ。

(もう、仕方ないなあ……由良くんは)

と、朝のお天気コーナーの由良湊「ゆら みなと」を思い浮かべてニンマリしてしまう。

彼がどんな悪さをして、理想の弟がしたことだと思えば大抵は許せてしまう。甘い、と自分でも思っけれど……どうしようもない。

「和美さん」

仕事を終え店を出たところで、待っていた彼の手には広げられた大きな傘。

まるで当たり前みたいに差し出された隣の空間に、仕方なく足は向かうけれど悪い気分ではなかった。

恋人と相合傘、なんて趣味じゃないはずなのに……ちょっと嬉しい。

普段なら絶対にしない腕を組む行為も、この空間なら少しも不自然じゃない。寄りかかることも、甘えることも違和感なくできそうだった。

「湊」

「はい、なんですか？」

「好き、かも」

なんて、口にする。

「和美さん、もう一度言ってください」

組んでいる和美の腕を手で掴んだ湊は、真剣に迫った。そこが人通りの多いメインストリートだということにまったく頓着していない彼の様子が、彼女を慌てさせる。

「えっ？ あ……なにを？」

「だって、僕初めて聞きました。和美さんからの、好きって言葉」

「……そう、だった？」

あれ？

いや、そうかも……と和美も気づいて赤くなる。

「だから、もう一回聞きたい」

「うっ、わ、わかった。わかったから迫らないで！ ちゃ、ちゃんと言う。その、あとで……」

もともとと言い募ると、彼は責めるみたい彼女を見た。

「あと？」

それが怒っているというよりは、優しい眼差しだったから余計に居たたまれない。

「べ、ベッドの上で……いい？」

まるで誘導尋問みたい。

勝手にそんな言葉が口からこぼれて、目を見開く。

（なっ、なんでそんなこと言っちゃうかな？ わたしっ）

べつに、彼からの提案があつたわけでもないのに……でも、こう言えば きっと 湊が喜んでくれるんじゃないかって思ったのは事実だ。

「うん。わかつた……楽しみにしてるね」

予想通り、あるいはそれ以上のふわりとした極上の微笑みを浮かべて湊は掴んでいた和美の腕を離すと、ふたたび腕を絡めるよう促して歩きはじめた。

「約束だよ？ 和美さん」

「わかつてるわよ！」

弾んだ彼の声に真っ赤になって、和美はそれでもそんな素直な彼がたまらなく愛しいと思う。

「どうしよう。僕、我慢できるかな？」

「え？」

「食事なんてナシでいいから、今すぐ和美さんとベッドに直行したいよ。駄目？」

「ダメ……！」

そこは、素直すぎでしょっ。

可愛くお願いされたって、空腹（コレ）だけは譲れない！ と和美は断固として首を縦に振らなかった。

レストランのテーブルに座って、和美は頬を染め彼を窘めた。

食前酒の白ワインを口にして、睨む。

「湊、笑いすぎだから」

「ご、ごめん。だって、和美さんが 必死 なのが……可愛くて」

「仕方ないでしょ！ わたしは今日一日働いてたのよ。昼だってあ

まり取れなかったし……お腹が空いてるの。我慢なんてできないわよ」

可愛い、なんて和美に面と向かって言う男性は少ない。こそばゆくて、少し照れる。

「湊って、案外 意地悪 よね？」

「そうですか？」

「だって、さっきの本気じゃなかったんでしょ？ ここ、予約制だし」

と、和美はそれなりの値段がしそうな店内をぐるりと見渡して、責めるようにチクリと告げる。

「年上をからかうなんて生意気よ？」

「半分は 本気 でしたよ」

したり顔で彼は言い、ちよつと懽然となつて黙りこんだ。

（ほんの冗談だったのに……もしかして、地雷だった？）

和美は自分の発言に悪いクセが出たのだと、謝る。

「ごめんなさい」

「どうして謝るんですか？ 僕もちよつと反省しました。和美さん相手だと確かに、その傾向があるのは否定できませんから」

「ちよ、ちよつと！ そこは否定しなさいよっ」

年下相手にからかわれる対象に見られるなんて、ものすごく、ものすごく！ 不本意なんですけど！！

「すみません、僕、和美さんの反応好きなんですよね。落ち着いて見えるのに不測の事態に弱いでしょ？ そういうとこ、見たいから……」

「……つい、意地悪なこと言うのかもしれない」

「……」

「確かに、子どもっぽいな……気をつけます。貴女に、嫌われたくないから」

本気で改めるつもりらしい湊に、和美は笑うしかない。

「べつに、いいけど。わたし、そこまでイヤってワケじゃないの……うん、ホント不思議なんだけど。湊ならいいかな、って思ってる

のよ？」

互いに目を合わせて、微笑む。

「そんな挑発していいんですか？ 知りませんよ」

「……怖いこと、言わないでよ」

「僕も本当にわからないんです。人に意地悪なんてしたこと、なかったのにな」

ポツリと言った湊の言葉に、和美の胸はキューンと鳴った。

（なに、それ！ 由良キューン、可愛いんですけどっ！！）

「湊！」

「はい」

「もうもう、あなた……それ、天然？ それとも計算？」

まじまじとその綺麗な顔を眺める。

「は？ どういう意味ですか？」

少し女顔で微笑みは極上、物腰は柔らかいのに時々強引で……情事ではさらにその男っぷりが上がる。年下なんて趣味じゃないのに、夢中になる。

「誘惑して。わたし、あなたと 早く ベッドに行きたいわ……湊」

瞳を瞬いた彼はくすりと妖しく微笑んで、彼女の手を取り上げる。そして。

「勿論、喜んで」

と、その指先に火を灯す冷たい唇をゆっくりと落とした。

第5話 とりあえず、今日も晴れ。（後書き）

第4話のその後、夕方のお話でした！

次の場面は、さらにそのあとのお話です。R15はつかない程度ですが、多少それらしい内容は含みます（あえて付けるならR15弱程度かな？）。ご注意ください。

第6話 とりあえず、今日も晴れ。その後。（前書き）

微量のR15を含みます、ご注意ください。

第6話 とりあえず、今日も晴れ。その後。

ベッドの上で、由良湊「ゆら みなと」は微笑んで「ねえ、欲しい?」と訊く。

ムウ、と飯田和美「いいだ かずみ」は唇を尖らせて、彼を睨む。

「……ほしい」

「和美さん」

真っ赤になる。言わせたい、と彼が目論んでいるのは勿論解かっているけれど……プライドと羞恥が言葉にするのを阻んだ。

「じらすなんて、ずるい!」

「和美さんが言ったんですよ? 誘惑して何が不満なんですか?」

「イジワル!!」

「それも、僕ならいいって言いましたよね?」

「そうだけど! こんな子供じみたのはイヤっ」

プイ、と顔を横に背けて主張する。

そんな彼女を見て、湊は声を立てて笑った。

「それ、ハレハレくんのマスコットストラップで主張してくる時点で間違ってると思いますよ?」

「うるさいうるさいうるさい!」

彼の担当している朝のお天気コーナーの「ハレハレくん」は愛らしい犬のマスコットキャラクターだ。猫の「アメリカちゃん」とともに子供たちにも人気が高く、番組の抽選プレゼントなどでストラップなどの関連グッズが作られている。

結構な売れ筋で、手に入れるのは難しい。

それを、湊の部屋で見つけた和美が目の色を変え、ぷらんと目の前にぶら下げられて交換条件を突きつけられる。

「僕とエッチしてくれたら、差し上げます」

「……………」

ねえ、欲しいですか？ と再度訊ねられ、和美は唇を尖らせたまま唸った。

肯定するのも、否定するのも憚られる。

（そんなこと、交換条件にしないでよ……バカ）

ストラップは欲しい。けれど、湊とそういう 行為 に至るのは決してそれが欲しいからじゃない。

解かってる。

湊が欲しいと思ってる言葉くらい……でも、意地悪だ。

チュツ、と尖る唇に触れるだけのキスをして、湊はまっすぐに視線を合わせる。

「和美さん、言って」

「だから、欲しいってば！」

「ストラップが？」

「湊がっ。ストラップのために抱かれないわよ、バカー！」

ギュツと抱きしめられ、耳に吐息がかかる。

ゾクリ、と肌が粟立った。

「じゃあ、好き？」

「好きよ、好き。こうしてるだけで、たまらないの……胸が、壊れそうよ」

こんなにドキドキして、初心な処女みたいに反応するのは久しぶりの感覚だった。

「緊張してる？」

キスをしながら、湊がクスクスからかうみたいに訊いてくるのが憎らしくて、愛しかった。誰も、こんなふうに訊かなかった。

コクン、と頷いて彼の背に腕を廻し——身をまかせた。

目覚めると、そこは見慣れないベッドの上だった。自分の布団ではない感触と匂い。五感で感じて、ようやく頭が一回転する。

気怠い体の鈍痛に、顔を顰める。

「いたた……」

腰が、痛い。それに、背筋とふくらはぎに人には言えない場所がヒリヒリしている。

腰と背筋とふくらはぎは運動不足や無理な体勢からくる筋肉痛だろう。

体は若くないのだと言われているようで、少し悔しい。

若い彼はきつと、こんな痛みを知らない。

布団の中でモゾモゾして、そこに誰もいないことを確認する。けれど、いた形跡は残っているから離れてそれほど時間は経っていないだろう。

なんとか重い体を起こして、ベッドの上に座ると体を隠していたシートが肌蹴て素肌が露わになる。

当然、と言えば当然だけれど何も身につけていなかった。

「あ、和美さん。目、覚めたんですね？」

寝室の開いた扉から湊が顔を覗かせて、憎らしいほどの爽やかな笑顔を向けた。

「湊」

「体、平気ですか？　ちょっと最後は無茶したから」

「ちょっと？」

やはり彼は若い。アレを　ちょっと　と公言するあたり、かなりのツワモノだと思う。

じつとりと眺める和美に、湊は受け流すように微笑んで、手を差し出すと彼女の目の前にぷらりと何かをぶら下げた。

「お詫び、というより約束の品です。どうぞ」

和美が何か答えるより先に落として、その手の中におさめさせる。

手の中の感触に笑みが浮かぶ。いいように扱われている感じがしないでもないが、指にひっかけ持ち上げて眺めればやはりソレは可愛いと嬉しくなる。

欲しい、とは思ってもなかなか手に入れない品なだけに。

「それ、和美さんが好きそうだな……」と思ってたんですね」

「そうなの？ よく分かったわね。わたし、逆にみられることが多いのに」

こういう可愛いキャラクターが好きだって言ったら、大抵意外目で見られて変な顔をされる。

それが煩わしくて、今では誰にも打ち明けていないのに。

「わかりますよ。よく子供番組見てるでしょ？ それに特撮モノとかも好きだよな」

さも当たり前と指摘されて、和美は目を瞠る。

「なんで知ってるの？ って顔してますね」

くすり、と笑って湊は呆然となる彼女の唇にキスを落とした。

「言っただでしょう？ 僕は ずっと 貴女を見てた、って」

第6話 とりあえず、今日も晴れ。その後。（後書き）

次回は、彼視点の番外SSになります。出会う前の心情が少し、分かるかな？ と思っています。

外話 君は僕の太陽（前書き）

由良湊視点の番外編です。出会い前のモノローグ。

外話 君は僕の太陽

彼女、に初めて会ったのは一年ほど前だった。

気象予報士として入社して一年と少し。時間は短いけれど念願のお天気コーナーを担当できるようになって、評価もそれなりに頂いて打ち切られることなく二年目を請け負うことも決まった。

その頃、番組で声を掛けてきた女の子と食事に入ったレストランでたまたますれ違って、肩が当たったのが彼女だった。

「ごめんなさい」

にこり、と上品に笑って会釈する。綺麗にひかれた鮮やかな口紅の口元も、薄いのにしっかりと施された化粧も体の線に合ったシツクなデザインの赤のワンピースも「彼女」らしかった。洗練された動作、きつとすぐく仕事のできる女性なのだろうと思った。

「こちらこそ、失礼しました」

恐縮する。けれど、由良湊「ゆら みなと」はこういう年上の卒のない 美人 がじつは一番好きなタイプだ。

一目惚れ、というのだろうか。

理想を形にしたら この女性 になるだろうと見た瞬間に奮えたくらいだ。

でも。

（僕って、絶対こういう女性「ひと」から好かれたことないんだよね）

大抵、可愛い系の女の子だ。年齢も近くて、年下とか同年が多い。年上も時々、声を掛けてはくるけれど……こういう美人は逆ナンパなんてしないし、相手に飢えてもいない。

少し離れたところで、男性の声がしたかと思うと彼女はそちらに向かって颯爽と去っていく。

（ホラね）

と、彼女に見合う落ち着いた相手がその華奢な肩を抱くのを見て湊は少しだけガツカリした。

「由良さん？」

隣にいた今日の食事の相手を見て、悪いことをしたなと反省する。

「何でもない、ごめんね」

首を振って、「いいですよ」とはにかむから、さらに罪悪感で無駄に優しくしてしまう。

（可愛い、は可愛いんだけどね。期待させるのもかわいそうかな……）

なんて、自分でも最低だなと自嘲しながら。

——さっきの彼女が湊の高い理想だとすれば、この女の子はつきつけられた現実でしかない。

次に会ったのは、夜の駅だった。

もうすでに終電に近い、閑散とした平日の構内は次にやってくる電車のアナウンスをする駅員の声だけが響いている。

『次にやってきます電車は。。。行き。。。行きでございます。なお、

と□□へはこの電車が最終でございます。お乗り越しのないよう……』

プルルル、と高いサイレンが鳴って、ドアが閉まる。

直前、

「させるかああ！ ハッ」

ドン、ガン！ と気合いの入った声とともに駆けこんできた逞しい女性の体に目を向けて、啞然となる。

（あの人は——）

まさか、と目を疑った。

その印象の違いも然ることながら、また会えたという 偶然 に。無事、最終電車（なのだろう、たぶん彼女にとっては）に乗れたことにご満悦の彼女は、スラスカの座席には座らずに扉のあたりに陣取ると空を眺めて目を細める。

レストランで見かけた完璧な所作ではなく、砕けた大人の女性のブライベートな顔。

見惚れてしまうのは、それでも湊の理想からかけ離れたわけではなく、むしろ近づいたからだろう。

彼女は、美人で、強く逞しい。

そして、たぶん、可愛い人。

何度か、最終電車が一緒になって少しずつ見えてくる。

ご機嫌な彼女の口から時々洩れて聞こえてくる歌が子供向けの番組の中で歌われる底抜けに明るい主題歌だったり、バッグに隠して付けているキーホルダーがその中の癒し系キャラクターだったりするのを見つけて、口元がゆるむ。

（それは、貴女の秘密？ それとも、あの「彼」には見せているの？）

スツと整った彼女の横顔に問いかけて、秘密ならいいのにと願った。

そして、動いた あの 幸運の日。

『ああっ。もうっ！ アイツのせいで由良くんの天気予報も無駄になっちゃったじゃない。バカア！！』

見るからに様子のおかしかった彼女を思わず追いかけて駅を降り、後をつける。ひとつ間違えればストーカー行為に近いそれやあって、湊は聞こえた彼女の叫びに最後のストッパーが外れたことを自覚し

た。

声を掛ければ見開く瞳、けれど警戒はされなかった。

もともとどちらかというと童顔で優しいといわれる外見だから、女性からの受けはいい。

首を傾げれば、彼女は微笑んで訊いてくれた。

「……どこかで、お会いしたことありました？ すみません、見覚えはあるんですけれど」

嬉しくて仕方なかった。

すぐそばで囁いて、もっとそばにいききたいと懇願する。

戸惑う彼女は可愛くて、流される彼女は綺麗だ。

「飯田（いいだ）、和美（かずみ）さん……って書くんだ」

彼女のマンションに強引に入りこんで、無理矢理の合意（つて言葉があるのなら、そう）でベッドを共にしたあと寝入ってしまったその人の名刺を鍵を探った鞆で見つけて口ずさむ。

「和美さん」

「ん……」

無防備に寝返りをうつ美しい横顔を見つめて、その頬に触れる。

彼女は理想で、この人は現実に目の前で眠っていて、抱きしめられる生身の女性だ。

理想、そして現実。

「手に入れるから、絶対に」

眠る彼女、飯田和美の頬に身勝手な誓いのキスをして、湊は部屋をあとにした。

第7話 晴れ間に降る、雨あられ。

「あれ？」

たまたま入った店の二階で、飯田和美「いいだ かずみ」は見覚えのある二人の影に気づいて、目を瞬いた。

偶然って、あるのね。

「どうかした？」

と、隣で由良湊「ゆら みなと」が不思議そうに訊く。

答えようと口を開きかけた時、相手も和美に気づいたらしく驚くくらい大きな声で「あー！」と叫ばれた。

叫んだ「彼女」の口を、一緒にいた「彼」がすかさず手で制して「落ち着いて」とでも囁くみたいに穏やかに彼女を見る。そうして彼女がようやく解放されると、困った顔で彼は頭を和美に向けて下げた。

彼女も慌てて周囲を見回して頭を下げ、駆け寄ってきた。

「ご、ごめんなさい！ ビックリしちゃって」

そうでしょうとも、と和美は微笑んで、相変わらず可愛い娘だなあと眺めた。

クリクリとした瞳と、艶のあるぽってりとした唇にフワフワの長い髪は少し明るい色をしていて白い肌によく似合う。

隣の彼はそんな見るからに目立つ容姿の彼女には少し地味な男性で、けれど誠実そうな好青年だ。

「すみません」

と、彼女のあとにやってきて丁寧に頭を下げる。

「お邪魔じゃありませんか？」

どうやら、和美もデートの最中だと思って（実際 そうなのだけど）気を遣ってくれている。

「少しも。わたしも驚いていたところだったし……お客様とこんなところでバツタリなんてね」

「ですよね！」

弾んだ彼女の声が和美の言葉に同意を示して、整ったパーツが綺麗にほころんで輝いた。

家具やインテリア雑貨などを集めた広い店内は一見倉庫のようで飾り気は少ない。その分、人の通るスペースは広く、極力人件費をかけない仕組みになっていて値段も良心的となっている。これから結婚を考えているカップルなら、見に来ていてもおかしくない。

と、つつい和美の目は細く笑んだ。

「順調そうで嬉しいわ。マリッジリングはまだ？」

「そうなんですよ！ イチってば、やれ挨拶がどうか式場がなんとかってもう！一緒に住んでるんだし一緒になのにな」

「だから、一緒なんだったらゆっくり準備してもいいと思うんだよ？一生に一度の思い出なんだし、婚約はしてるから」

「だーからー！わたしは早く「一之瀬」になりたいんだってばっ。で、イチを「あなた」って呼ぶんだ」

うつとり、となった彼女は、頬を染めて自分の世界に入ってしまった。

そんな彼女を愛しいと微笑んだ彼が、苦笑いを浮かべる。

「二ノはこうなると止まらないので。近々伺うと思います」

「そうね、早く安心させてあげるといいと思うわ」

微笑んで、和美は「お待ちしています」と頷いた。

「和美さん」

背後で聞こえた声にそういえば説明する前に話し込んでしまったことに気づく。

「あ。一之瀬様、こちら由良湊です。――で。ええっと、湊。こちらは一之瀬様と二宮様でお店のお客様なの」

「サラリーマンですよ」と自己紹介した湊に、二宮穂乃香「にのみや ほのか」は「えー、ウソウソ！ 絶対見覚えあるもの」と食い下がり、「ねえ、イチ？」と隣の一之瀬聖也に同意を求めた。

「確か、朝の天気予報じゃないかな？」

と、彼が彼女のうる覚えの記憶を補足するように答えると、「そう！ ソレソレ」と嬉しそうに跳ねる。

「ほらあ！ やっぱりあの由良さんでしょ？」

と、何故か形のいい胸を張る。

「ええ、まあ。でも、サラリーマンも嘘じゃないでしょう？」

につこり笑う湊に、彼女は目を瞬いて「そうなの？」と驚いてみせる。

「気象予報士もしがない雇われ人ですから」

「そっかあ、働くって大変だよねえ」

しみじみと言って、仰ぐ表情は本当に守ってあげたくなるような甘い顔をしている。

それから、彼らの会話は彼女の職業に移ったらしく今度は湊が訝しむように訪ねていた。彼女が普通のOLだと驚きだろう。

和美だって、何度も確認したくらいだ。しかし、確かに芸能界に彼女は在籍していないのだから、もったいない話だと思う。

クルクル変わる華やかな表情も、メリハリのある抜群のプロポーションも一介のOLとしては目立ちすぎるだろう。

「ホント、別世界って感じねえ」

「そうですね」

と、少し離れたところで彼ら二人を眺めていた和美に、穏やかな彼の相槌が入った。

目線を上げれば、そこには一之瀬聖也がいて彼の目も絵になる二人を映している。

「妬ける？」

少し意地悪をするように訊くと、逆に聞き返された。

「飯田さんはどうですか？ 彼に何か言いたいと思います？」

「思わないわね」

キツパリと言って、微笑む。

それは年の差のせいなのか、その特殊な彼の職業柄か……湊相手に不安になったことは まだ ない。いつか、感じるようになるのだろうか？

やだわ、想像できない。

「一之瀬様も？」

「飯田さんの心境と同じかは分かりませんが……僕の場合、彼女に救われていますから」

「あー！ イチっ。飯田さん、ズルいです。抜け駆けですっ」

ダツと駆け寄ってきた彼女は、彼の腕にくつつくと「くわっ」と和美を渾身の目力で威嚇した。

「たとえ飯田さんでも、イチは譲りませんからー!!」

思わず、和美は吹き出した。

確かに、ここまでベタ惚れされていれば妬く暇などないだろうな、と可笑しくて仕方ない。おそらく半端なくモテているだろう彼女と付き合う上で、彼女のこの 一途なまでの 素直さに彼は何度も救われているに違いない。

「いいわねえ、お幸せに」

和美が言つと、お返しとばかりに聖也の言葉が返ってきた。

「飯田さんも、でしょう？ お幸せに」

勘違いも甚だしい。とは思ふものの、ベッド売場に来ていればそう思われても仕方がないのかもしれない。

でも、誤解よっ！

「ありがとうございます」

密やかに思考停止していた彼女の代わりに湊が応え、さりげなく肩を抱き寄せたから和美は狼狽えて「ちがう、ちがう」と首を振つて恥ずかしくなる。

（ああー、お客様の前で失態だね。絶対、顔、真っ赤だもの！）

顔を困つたと顰めて、和美は湊を恨めしく睨もうとして――できなかった。

（な、なによ？ なんで……そんな怒つたみたいな、傷ついた表情

「かお」するのよっ）

ドキッとして、ビクウとくるじゃない。心臓に。

何か……わたし、悪いこと言ったかしら？

第7話 晴れ間に降る、雨あられ。(後書き)

のんびり更新になると思いますが、続きます。
よろしければ、お付き合いください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5490s/>

天気予報土な恋

2011年9月11日23時25分発行